



私の  
**なんとか  
しなきゃ!**

Vol. 39

## PROFILE

宮城県仙台市在住。自身の出産・育児のエッセイ漫画「子供なんか大キライ!」は10年のロングラン連載。その後、「小1タイム」「マンガでわかるコドモの医学」「オンナの病気を話しましょ。」などを発表。東日本大震災で被災した女性を対象に健康相談に応じるブログ「震災にあった女性の、からだところの救急箱」を開設。震災後の福島の人々の生活を描いた「ふくしまノート」を連載中。

漫画家になってから、女性や子どもをテーマにした作品を描き続けてきたのですが、実はずっと抱いていた夢がありました。「開発途上国で日本の医療支援を取材する」。コレとってはっきりとした理由があったわけではなく、近所の子どもが気になるのと同じ感覚。私たちはお腹いっぱい食べることができているのに、世界には一日一食すら難しい子どももいる。漫画家として、そして2児の母親として、私にできることがあれば何かしたいと思っていました。

でも2011年3月に東日本大震災が起これ、周りの状況は一変しました。仙台在住の私はいてもたってもいられず、個人的にボランティアをしたり、福島の状態を漫画にして発信したり…。すっかり東北モードになっていたのですが、いくら伝えても前に進まないことが多すぎて、1年くらいで行き詰まってしまうました。

そんな時、あの夢を思い出したので。別の場所で困難に直面している人たちに会えば、何か答えが見つかるのではないかと。これまでの縁をたどっていき、

ザンビアで日本が協力している感染症予防のプロジェクトを視察することになりました。

私にとってアフリカは、全く未知の世界。でも、実際に自分の目で見るまでは、あまり情報収集をしないと決めていました。知っている人が描いても、知らない人にはよく分からない。先入観を持たずまっさらな状態で、現地のありのままの姿を受け止め、伝えたいと思いました。

そして2013年夏、1年越しの企画が実現してザンビアへ。首都ルサカは高い建物がほとんどなく、のんびりとした雰囲気でした。

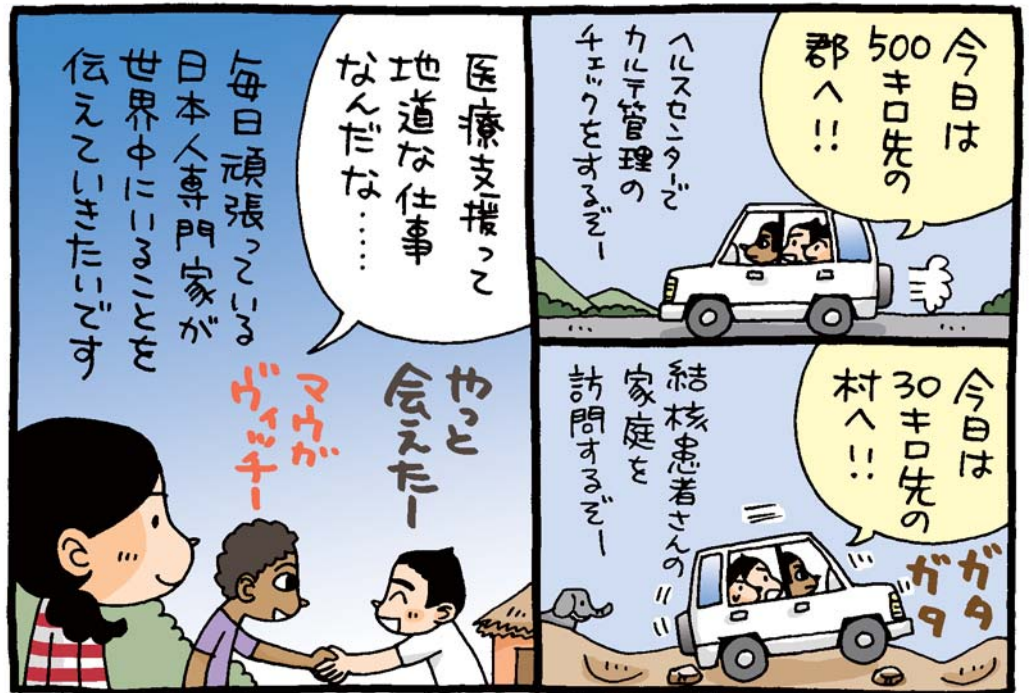
HIV/エイズの患者さんが多いという地方の病院に連れて行っていただいたのですが、思わず言葉を失いました。日本の病院のイメージにはほど遠く、平べったい小屋のような建物の周りにたくさんの方があふれていたのです。ここは病院といっても守られた環境ではない。医療技術以前の問題がたくさんあるように感じました。「じゃあ、どうすればいいの?」と、途方に暮れてしまいました。

## ありのままのアフリカ

## 井上きみどり

漫画家

INOUE Kimidori



©Kimidori Inoue

でも現地で活動する日本人のお医者さんたちはとても前向きでした。まさに「縁の下の力持ち」という言葉がぴったり。決してあきらめることなく、何事にも真摯に向き合う姿が、現地の人たちの心を動かしているように感じました。時間はかかるかもしれないけれど、日本人としてできることはたくさんある。そう思いました。

ザンビアに行って分かったのは、途上国でも日本でも、大切なのは“人”だということ。今の時代、何かにつけて境界線を引きたがる人が多いけれど、もうそれは無理がある。そういうのはもういいじゃない、みんなで助け合って生きていこうよと、漫画を通じて分かりやすく伝えていきたいと思います。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索